

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

(『歎異抄』聖典P 640)

すでにして願います

第11組澄心寺住職

圓淨 貴之

text by Takahisa Enjo

先日参加した研修会の御講師を駅までお送りした際に、日頃思っていることを尋ねてみた。「最近「出産前診断」ということを耳にしますが、その背景には「優生思想」があり、出産の選択をできる自由の裏側に選択を迫られる苦しみがあるのではないのでしょうか。人間のすることには必ず裏がありますね。」との問いに対して、先生は障害を持って生まれた子どもの親御さんに「この子がいてくれたからみんな笑顔になれると言える時が来る。」と伝え、その親御さんから数十年後に「おっしゃって下さった意味がわかりました」と言われたというお話を聞かせて下さった。私にしてみれば、この会話に食い違いを感じた。しかしこの会話を思い返したときに、問題があるからどうにかしたいという想いで先生に同調を求めている私に気付かされた。廣瀬杲先生は著書の中で次のように述べられる。

「生の始まりに暗く、死の終りに冥い」中間に、生死という人生があるとするならば、その人生というものは、どこを押えても、すべて偶然性の上にか成り立っていないわけです。ですから、そのままでは、どれほどその人生を肯定しようとしても、肯定しようとする全体が、消極性、偶然性を感じ取っていかなくてはならない。ということで、そういう人間の生の消極性というものを一転せしむるということは、むしろその消極性に固執する人間の心、したがって自我の主張というかたちを通して、その消極性を変えたいという夢を見る心、その心をかぎりなく奪い去っていくという、その「奪う道」というものを人間それ自体に与える。ということが「往生浄土」の相ということになるのだと、こう了解していいと思います。」(『真宗救済の道理—廻向論—』P 151)

廣瀬先生は、自己肯定して生きることに對する積極性と自らの努力が報われるという必然性を求めてやまないのが人間であると指摘する。そしてそのような夢を見ていたい人間に對して「奪う道」を与え、その道を受け取った人に「往生浄土」の相を見ると言われる。しかし、私自身の意識は、決してこの能動的に「奪う道」を生きる人になりたいとは思えないのも事実である。

御門徒の年忌法要で勤行後、お斎の席で喪主の方が隣に座られた。一生懸命仏教の話題を振ってくる。でも私が何か答えても別の話題を振ってきて一向に深まらない。段々私も苛立ってきた。そんな雰囲気を感じてか、「いやあ、昨日うちのやつにあんたがお寺さんの隣に座るんだからねと言われて困っていたら、たまたまテレビで仏教のことやっていたね。」この方はお嬢さんでこれまで熱心にお寺に足を運んだことはなかった。それなのに、夕べから夜更かしして私のためにテレビを見て話題を探していて下さった。苛立った自分を恥じると同時に、涙ぐむほどの有り難さを感じた。「奪う道」を生きたい生きたくないという意識を超えて、「気付けよ気付けよ」というはたらきはすでにして届いている。

私の想定する救いは「たら・れば」という未来に実現されるであろう救いであり、真宗の救い、仏教の救い、つまりは真に人間が（私が）救われる救いは、すでにして誓願されていた救いであった。しかしながら、私にとっては、念仏や信心は救済の条件ではないと聞かされ、ときには自らそう語っていても内心では、「念仏申したら救われる」、「本願を信じれば救われる」、という期待感から一歩も出ていないことに気付かされる。